

いじめにおける傍観者の援助行動を促進する状況要因について

—被害者の「社会的望ましさ」の影響に着目した検討—

元 笑 予 東京学芸大学連合大学院連合学校教育学研究科
坂 西 友 秀 埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座

キーワード：いじめ 傍観者 加害者 被害者 いじめ制止 性格特徴

問題と目的

深刻な現状 いじめ問題は、現代社会における一つの大きな課題として早急に解決を求められている。いじめは、被害者の心身に長期に亘り影響を及ぼす過酷な経験である（坂西, 1995）。文部科学省が毎年実施するいじめの調査結果を見ると、2011年度のいじめ認知件数は70,231件（小学校33,124件、中学校30,749件、高校6,020件、特別支援学校338件）で、現行の調査方法になった2006年度以降では最少で、最も件数の多かった2006年度（124,898件）の56%であった（文部科学省, 2012a）。

数値的にはいじめ件数の減少が示されているが、学校で把握できていないいじめが多数存在する可能性がある。岩手県で中学生男子が自殺した事件でも、学校が再調査した結果、見逃していたいじめがあったと報告されている（NHK, 2015a）。他方で、児童・生徒の数が減少する中、発生件数だけでは実態は把握できない。「子ども一人あたり」のいじめの件数を指標にすると、いじめは減っていない（坂西, 2012）。被害者が「自殺」する最悪のケースが後を絶たず、いじめの現状は深刻だ（NHK, 2015b）。

いじめの態様と特徴 安藤（2013）は、小学校4年生から中学2年生1,089名を対象に過去1ヶ月間のいじめの実態調査を実施した。調査では15のいじめ行動の平均経験者率は、小学生で被害経験者26.3%、加害経験者20.1%であり、中学生で被害経験者20.7%、加害経験者15.5%であった。約5人に1人が1ヵ月内にいじめに関わったと回答した。被害経験の内容は、小学生では、「無視」が最も多く半数近くが経験していた。次いで、「叩く等の暴力」、「持ち物の奪取」、「喧嘩の挑発」、「仲間はずし」で、30%以上の児童が経験していた。中学生でも、小学生同様「無視」が最も高い被害経験率を示した。次いで「叩く等の暴力」、「悪口」を30%以上の子どもが経験していた。この結果をみると、いじめ問題は依然として存在し、深刻な状態が続いている。いじめを低減し解消するために必要な要因は何か、この点を明らかにすることは急務である。

いじめの定義には様々なものがあるが、本研究では次のように定義する。「いじめは一方的に相手に対して加害行為をし、繰り返し身体的・心理的な傷害を加える、被害者と加害者の間の力関係のアンバランスな攻撃行動である」。加害者が一方的に被害者に対して加害行為をし、被害者はただ攻撃を受けるしかない事態である。両者の関係は互いに対等な力関係にあるものではなく、優勢な片方が相手に一方的に被害を与えるものである。従って、いじめがいつ、どこで、どのように発生するかは専ら加害者に依存することになる。また、いじめは一回限りのことではなく、何回も繰り返され、被害を与え続けることはその特徴である。さらに、被害にも内容の違いがあり、

例えば、身体的な暴力（殴る、叩く等）、心理的な傷害（言葉の暴力、無視等）などがある。いじめは、身体的な攻撃と言語的な加害が同時に行われることが多い。本研究では、いじめは加害者が被害者に対して加える多様な「攻撃行動」として捉える。

いじめにおける「反作用力」 いじめには、「反作用力」が存在している。ここで言う「反作用力」とは、いじめの当事者である加害者と被害者以外の第三者がいじめを抑える行動を指す。「反作用力」の担い手は加害者（いじめの子）—被害者（いじめられる子）をとりまく周囲の子どもたちである。すなわち、いじめをはやしたておもしろがって見ている子どもたち（観衆）と、見て見ぬふりをしている子どもたち（傍観者）が反作用力の中心になる（森田・清永, 1994）。「傍観者」は、いじめを見て見ぬふりを装う子どもたちだ。彼らがいじめに対して冷淡反応を示し、加害者に注意したり、止めたりすれば、その行為は「反作用力」となり、いじめを抑止する力になるのである。

傍観者の未知を装う態度の背景には、自らがいじめ事態に関与することで、一転して被害者へと陥れられる恐れが生まれるからである。そのため、この層の子どもたちの大部分は、実際にはいじめを抑止する力とはならない。この自己保身は、加害者への服従的態度の表明であり、彼らの存在はいじめを抑止するどころか、かえっていじめを黙認し、加害者を潜在的に支持する存在になってしまう。いじめを抑止するためには、観衆と傍観者が積極的にいじめを否定することが必要である。本研究では、いじめを抑止するために、必要な条件や環境は何かを探り検討する。

いじめ制止に関わる要因 いじめを抑止する要因にはどのようなものがあるのだろうか。大坪(1998)は、いじめ傍観者の援助抑制要因を検討している。いじめ場面の仮想物語と山崎(1996)が作成した援助抑制要因項目の一部を変えて、小中学生を対象に調査を実施し、「事態の肯定」・「被害者への帰属」・「いじめに対する恐怖」・「評価懸念」・「事態の悪化への懸念」・「事態解決の糸口のなさ」という6因子を抽出した。因子ごとに、①傍観者と加害者・被害者との友人関係、②加害者の人数、③性差、この3条件によって援助抑制要因に違いが見られるかどうかを分析した。その結果、被害者が傍観者と友人関係にあるか否かが、第三者の援助・抑止行動に大きな影響を及ぼすことが示された。

また、杉原は、いじめ援助・抑止要因として、被害者の性格などを取り上げている。彼の調査によると(1986)、いじめ被害者に顕著だった性格特性は、「のろまな」「弱虫な」「人気のない」「責任感の弱い」「目立たない」「おとなしい」「気の弱い」であった。この研究では、被害者のパーソナリティ特徴は、内向的で、学級内でも消極的で目立たない存在であり、依存性が強く非常に神経質な面をもっていると考えられている。

文部省の生徒指導資料(1984)では、被害者の性格については、「わがままで、依存性の強いこと、また小心で過敏であり、びくびくしやすい反面、自己顕示欲が強く、反抗したりしやすい」と指摘している。

制止行動と被害者の個人的特徴 これらの研究を基に、被害者の特徴が、第三者のいじめへの介入、援助・抑止行動にどのように影響するのかを吟味することにする。本研究では、被害者の特徴として次の3つを取り上げることにする。一つは、被害者の学業成績（成績が良いこと）であり、第二は性格や特徴（わがまま・粗暴など）であり、第三はコミュニケーションの良し悪しである。

これらの3つの要因が、第三者の援助・抑制行動に影響すると考える根拠を述べる。最初に、倫理的な面から本研究に触れておこう。被害者の個人要因、とりわけ「社会的望ましさ」の低い特徴や否定的属性を取り上げることは「倫理的」に慎重でなければならない。本研究では「倫

理的な問題」には注意しながらも、教育現場で潜在的に重要な子どもの消極的な、社会的望ましさの低い諸特徴が、いじめへの傍観者の介入、制止行動にどのような影響を及ぼすのかを吟味し検討することにする。

取り上げる第一の要因は、子どもの「成績」に関わるものである。成績の「良し悪し」は子どもが関心をもつ問題である以上に、教師・学校関係者が注目し重視する問題である。換言すれば、成績を一つの評価尺度にして、子どもと学校の「社会的望ましさ」の序列を強く意識しているのである。全国学力テストが、このことを裏づけている。文部科学省のテスト実施の趣旨からすれば、子どもと学校の「優劣」と「序列化」を図るためのものではない。子どもの学力の実態を把握し、教育実践の充実と教育・指導の改善を促進する狙いがある。それにもかかわらず、成績の「善し悪し」の公表による子どもと学校の序列化への懸念は、教師と学校、さらには社会に広くかつ深く浸透している。実際、テストの実施に当たって、管理職にある教員が、率先して成績の「悪い」子の成績を除外して集計し、学校の成績を上げる「不正」操作が行われた（琉球新報, 2007a, 朝日新聞, 2007b, J-Cast, 2007c）。全国学力テストは、子どもの人権、学習権に関わる問題を生じさせたり、さらに「高得点を獲得するためのテスト対策に走らざるを得ない、解答の正誤を改ざんする、障害のある児童を受験させない」等の弊害を生んだりする危険があると指摘する意見書も提出されている（日本弁護士連合会, 2008）。子どもの成績は、これほどに社会的に強力な影響力を持ち、潜在的に子どもの勢力関係に反映し、いじめに関わる可能性のある重要な要因と考えられる。

第二は、子どもの「性格」、言動の特徴である。中学一年生男子を、18歳の少年を主犯格とした中学生を含むグループが殺害した事件は、子どもの粗暴な性格が顕在化している（寒川, 2015）。奈良県桜井市の中学2年の女子生徒が、同級生の女子生徒からいじめによる暴行を受けけがをしたとされる問題で、警察は生徒の腰などを蹴ったとして、同級生1人を傷害などの疑いで書類送検した（NHK, 2012）。いじめには、加害者の粗野な暴力的行動が伴う場合が多い。注意すべきは、加害者と被害者が、容易に入れ替わることが、現代のいじめの大きな特徴であることだ（坂西, 2012a）。おとなしい子、積極的な子そして乱暴な子と、多様な子があるときは加害者に、またあるときは被害者になる。子どものいろいろな特徴、独特の性質を持つ子が、被害者になる可能性が大きい。子どもがいじめ場面に遭遇した時、いじめに介入し止め、制止しやすさは、被害者の特徴に影響されることはないのであろうか。本研究では、子どもの属性が、傍観者のいじめ制止に及ぼす効果も吟味する。

第三は、子どものコミュニケーションである。人間関係（依存性）については、人とコミュニケーションをうまく取るか否かは人間関係を測るのが重要なものである。友達もなく集団から孤立している子どもは、誰も手助けすることはあるまいという安心感から、いじめられやすくなる。特に、加害者が複数の時によく狙われる。本研究では、子どものコミュニケーションも入れて、傍観者のいじめ制止に及ぼす効果を吟味する。

本研究の仮説 被害者の成績については、受験戦争における成績至上主義の影響で、成績のいい子に対する周囲の反応は一般的に肯定的になると予想される。成績の良い子どもは、教師や周りの友達に疎んじられることは少なく、いじめられにくくなる可能性が高いであろう。彼らは、自信があり、自尊心も高く、周囲の環境によって萎縮することが少ないであろう。そのため、周囲の子は、彼らはいじめられても、自分自身で解決する能力を持つと考える可能性が高いであろう。以上の理由から、傍観者は、いじめに介入し、制止する必要性を感じないであろう。

他方、成績の低い子は、序列が強く意識される学校環境では、社会的地位が相対に低くなり、いじめの対象になりやすいかもしれない。傍観者は、彼らの社会的立場は弱いと認識し、いじめられた時、いじめに介入し、制止しないと事態は悪化する可能性があるかと推測するかもしれない。そのため、いじめに介入し、抑制する可能性が高いと考えられる。以上から、傍観者は、成績の高い子より低い子がいじめに遭っている時に、事態に介入し制止することが多く鳴るであろう（仮説1）

性格については、おとなしい、反応が緩く、言語表現を特異としない子をいじめられやすい性格として焦点を当てた。おとなしい子、自己表現の苦手な子は、自分が不利な立場に置かれたとしても、自己主張することが十分できず、一方的に守勢に回らざるを得ないことが多いと予想できる。それに対して、行動的で積極的な子は、言葉で意思表示したり、行動を通じて自己表現したりすることが可能である。従って一方的に不利な立場に甘んじ続けることは少ないと思われる。後者に比べ前者の子どもに対しては、傍観者は何らかの援助、支援ないしはいじめを制止する必要性をより強く感じると推測することができる。このように、子どもの特徴、性格・行動特性によってもまた、傍観者のいじめへの介入、制止行動は大きく影響されるであろう。この点の吟味が本研究の第二の目的である。上述の考察から、傍観者は、積極的で社会的望ましさの高い子より、社会的望ましさの低い子がいじめに遭っている事態で、傍観者は介入、制止する行動をとることが多くなるであろう（仮説2）。

なお、本研究ではいじめの種類（身体的いじめと言語的いじめ）による傍観者の援助行動の違いについて吟味する。特に仮説は設けずいじめの種類別に別々に分離して分析し考察する。

ところで、いじめは多くの場合、個人対個人の一对一の関係で起こることは少ない。集団的な事態で、特定の個人に言語的、身体的攻撃が継続的に繰り返されることが多い。本研究では、集団的ないじめと個人的いじめでは、傍観者の介入の容易さ、制止行動の取り方に違いが生じるのか否か、探索的に検討を試みる。なお、要因が多くなり結果の解釈が錯綜することを防ぐため、集団場面と個人場面を分離し、それぞれ独立に分析し検討することにする。

本研究では、調査協力者・回答者の現在のいじめの実態と経験を直に問う方法は用いなかった。最大の理由は、児童生徒に、いじめの実態・経験についてつぶさにかつ克明に調査をすることは、精神的苦痛を強いる可能性が大きく、潜在的にいじめがある場合、事態を悪化させる危険があるためである。第二の理由は、教育現場が、いじめ問題には、厳しい対応が求められており、外部からの調査依頼が極めて困難な状況にあることによる。

以上より、本研究では、高校生と大学生を対象にして、回想法で実施する。中学校の1年生の時のことを思い出して質問紙に回答させる。なぜならば、高校生と大学生はいじめの当事者ではなく、客観的に冷静に回想し、回答することができると考えたことである。

方法

調査期日

高校の調査は2011年2月と10月に実施し、大学の調査は2011年12月に実施した。

調査対象

埼玉県公立高等学校の生徒175名（男子45名、女子129名、無記名1名、平均年齢17.1歳）で、埼玉県国立大学と千葉県私立大学の生徒151名（男子47名、女子103名、無記名1名、平均年齢

20.2歳)であった。

質問紙の作成

本調査は、いじめの経験、いじめが起こる時の対処行動、性差と子どもの望ましさ(高・低)による身体的いじめ・言語的いじめに対する意識などに関わる項目を作成し、質問紙にまとめた。シナリオ法を用いながら、質問項目への回答は「あてはまらない」から「あてはまる」の4点尺度を用いた。

①回想法によるいじめ場面の種類：

a 個人場面对集団場面

b 被害者の社会的望ましさ(望ましさの高い子对低い子)

②回想法によるいじめ場面の提示：

シナリオ法

ある登場人物がいじめられる状況の説明とセリフによって、簡単なシナリオを作り、そのいじめ場面に関する質問項目を作成した。その中で、シナリオは個人場面・集団場面(2)×被害者の社会的望ましさ(2)×いじめの種類(2)という8つの場面を分かれている。いじめの場面(8つ)の違いはアンダーラインを強調した文で操作した。

例えば、場面Ⅰ(社会的望ましさ低・身体・個人)あなたは太郎くん、たけしくんと同じクラスで勉強しています。たけしくんは成績がわるく、わがままで、人とうまくコミュニケーションをとれません。

ある日、たけしくんは太郎くんが、ある子がいじめるところを見て、太郎くんにいじめは悪いことだと言いました。その後、太郎くんはたけしくんの注意に腹をたて、たけしくんをいじめerようになりました。太郎くんはたけしくんに時々なぐったり、無視したり、嫌がらせをしたりします。

太郎くんの「たけしくんいじめ」を見ていて、あなたはどうしますか。

場面Ⅱ(社会的望ましさ低・言語・個人)あなたは太郎くん、たけしくんと同じクラスで勉強しています。たけしくんは成績がわるく、わがままで、人とうまくコミュニケーションをとれません。

ある日、たけしくんは太郎くんが、ある子がいじめるところを見て、太郎くんにいじめは悪いことだと言いました。その後、太郎くんはたけしくんの注意に腹をたて、たけしくんをいじめerようになりました。太郎くんはつよしくんにときどき悪口を言ったり、からかったり、悪いうそをいいふらしたりします。

太郎くんの「たけしくんいじめ」を見ていて、あなたはどうしますか。

場面Ⅲ(社会的望ましさ高・言語・集団)あなたは太郎くん、つよしくんと同じクラスで勉強しています。つよしくんは成績がよく、明るく、人とうまくコミュニケーションをとっています。

ある日、つよしくんは太郎くんたち(いずみくんとあきらくん)がある子がいじめるところを見て、太郎くんたちにいじめは悪いことだと言いました。太郎くんたちは、つよしくんの注意に腹をたてて、つよしくんをいじめerようになりました。太郎くんたちはつよしくんにときどき悪口を言ったり、からかったり、悪いうそをいいふらしたりします。

太郎くんたちの「つよしくんいじめ」を見ていて、あなたはどうしますか。

場面Ⅳ(社会的望ましさ高・身体・集団)あなたは太郎くん、つよしくんと同じクラスで勉強しています。つよしくんは成績がよく、明るく、人とうまくコミュニケーションをとっています。

ある日、つよしくんは太郎くんたち(いずみくんとあきらくん)がある子がいじめるところを見て、太郎くんたちにいじめは悪いことだと言いました。太郎くんたちは、つよしくんの注意に腹をたて

で、つよしくんをいじめるようになりました。太郎くんたちはたけしくん時々なぐったり、無視したり、嫌がらせをしたりします。

太郎くんたちの「つよしくんいじめ」を見ていて、あなたはどうしますか。

設定したストーリー・場面を要約すると表1のようになる。表中のブランクは、本文では「刺激文」を例示していないが、質問紙にはストーリーが掲載されていることを意味している。

表1 シナリオによるいじめ場面の分類例

		個人的いじめ	集団的いじめ
社会的望ましさ高群	身体的いじめ		場面IV
	言語的いじめ		場面III
社会的望ましさ低群	身体的いじめ	場面I	
	言語的いじめ	場面II	

③質問項目の作成：表1に示す

ように、被害者の「社会的望ましさ」（学業成績・性格・コミュニケーション）、いじめの種類（身体・言語）、加害者の集団性（個人・集団）を組み合わせた合計8つのストーリー・場面を作成した。質問項目は「いじめを止める」、「先生などの大人を呼びに行く」、「見て見ぬふりをして、どこかに行ってしまう」など3項目で、四段階の評定で回答させた。

調査の実施

調査は、高校と大学で授業の一部を割いて集団実施した。調査開始前に無記名回答であること、中学校1年の時を振り返ながら回答すること、答えたくない質問には答えなくてよいこと、一つの質問には考え過ぎず、思い出せる版で回答することを伝えた。調査の実施に当たっては、個人場面と集団場面を別々の質問紙にし、それぞれに身体的いじめと言語的いじめの2種類のストーリーと社会的望ましさの高低の2種類のストーリーを掲載した。従って、調査への協力者は、2群に分けられ、個人場面と集団場面は被験者間要因であり、いじめの種類と社会的望ましさの要因は被験者内要因である。

また、調査に先立って、一般的な傾向を明らかにするための調査であり、個人を取り上げた個別の分析は行わないことを説明した。その上で、可能な範囲で調査への協力をお願いした。特に、回答拒否はなかった。

結果

個人場面と集団場面を別々に、また身体的いじめと言語的いじめを分けて分析した。性（男・女）と被害者の社会的望ましさの違い（高・低）を独立変数にし、いじめ場面に遭遇した時の対処行動（いじめを止める・誰かを呼びに行く・見てみぬふりする）を従属変数にした2要因の分散分析を行った。結果の記述の全体像を整理すると、表2の通りである。

性（2）と被害者の「社会的望ましさ」（2）を独立変数に、いじめに遭遇したときの対処行動に関する項目の評定値を従属変数にして、二要因の分散分析を行った。主な結果を、以下にまとめた。

表2 結果の整理・分析の全体的構成

I 高校生の結果	
1. 個人場面	①身体的いじめ
	②言語的いじめ
2. 集団場面	①身体的いじめ
	②言語的いじめ
II 大学生の結果	
1. 個人場面	①身体的いじめ
	②言語的いじめ
2. 集団場面	①身体的いじめ
	②言語的いじめ

I 高校生の結果

各条件の評定値の平均と標準偏差を整理したものが表3である。

表3 いじめ場面（個人場面と集団場面）およびいじめ種類（身体的いじめと言語的いじめ）の平均と標準偏差（高校）

	全体		男子		女子	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
個人場面						
身体的いじめ						
いじめを止める	2.44	0.97	2.00	0.95	2.51	0.95
誰かを呼びに行く	2.65	1.09	2.08	0.90	2.75	1.10
見てみぬふりをする	2.06	0.99	1.92	1.00	2.09	0.99
言語的いじめ						
いじめを止める	2.30	1.05	2.33	0.78	2.29	1.09
誰かを呼びに行く	2.65	1.14	2.33	1.07	2.71	1.15
見てみぬふりをする	1.94	0.99	1.67	0.78	1.99	1.01
集団場面						
身体的いじめ						
いじめを止める	2.20	1.06	2.52	1.15	2.04	0.98
誰かを呼びに行く	2.56	1.14	2.55	1.15	2.56	1.15
見てみぬふりをする	2.11	1.02	2.07	1.03	2.13	1.02
言語的いじめ						
いじめを止める	2.24	1.12	2.14	1.22	2.29	1.07
誰かを呼びに行く	2.51	1.17	2.24	1.21	2.65	1.13
見てみぬふりをする	1.95	1.07	1.76	1.06	2.05	1.08

1. 個人場面

①身体的いじめ

被害者の「性格がよく、勉強ができ、人間関係がよい」場合（子どもの望ましさが高い）と、被害者の「性格が悪く、成績が良くなく、人間関係がまずい」場合（子どもの望ましさが低い）では、いじめが発生した時に、周囲の子（傍観者や観衆など）は止めたり援助したりする行動に違いが生じるのか。分散分析の結果、いじめへの対処行動の主効果が有意であった（ $F(2, 158) = 5.14, p < .01$ ）。その結果からみると、個人の身体的いじめが発生した時、傍観者は「大人など呼びに行く」、「いじめを止める」、「見てみぬふりをしない」傾向が強く示された。

②言語的いじめ

分散分析の結果、いずれも有意ではなかった。

2. 集団場面

①身体的いじめ

分散分析の結果、被害者の社会的望ましさの主効果が有意であり ($F(1,81)=7.27, p<.01$)、いじめへの対処行動の主効果も有意であり ($F(2, 162)=4.25, p<.05$)、性×望ましさ×いじめへの対処行動の交互作用も有意であった ($F(2, 162)=4.67, p<.01$)。

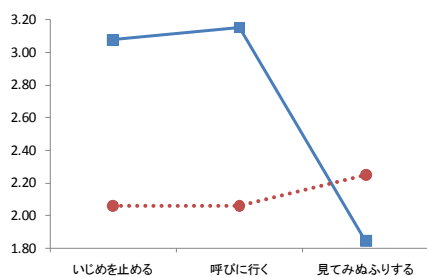


Figure1 性×望ましさ×対処行動の交互作用 (男子の場合)

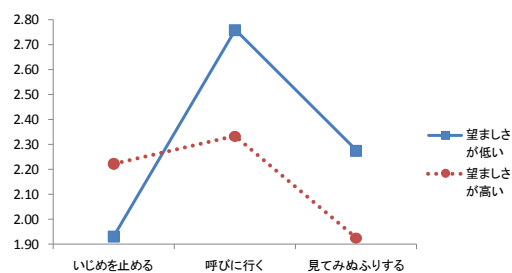


Figure2 性×望ましさ×対処行動の交互作用 (女子の場合)

まず、集団の身体的いじめが発生した時、被害者の社会的望ましさが低いほうは高いほうよりいじめへの対処行動を取りやすくなった。また、傍観者は「大人など呼びに行く」、「いじめを止める」、「見てみぬふりをしない」傾向が強く示された。これは仮説2を支持した。

さらに、交互作用の効果について、各条件の評定値を図に表したものがFigure 1、2である。LSD法を用いて有意水準を5%に設定して下位検定(多重比較)を行った。男子の場合、被害者の社会的望ましさが高いほうより望ましさの低いほうは「大人など呼びに行く」「いじめを止める」「見てみぬふりをしない」可能性が高かった。

一方、女子の場合、被害者の社会的望ましさが高いほうより望ましさの低いほうは「大人など呼びに行く」可能性が高く、「いじめを止める」「見てみぬふりをしない」可能性が低かった。

②言語的いじめ

分散分析の結果、性別の主効果が有意であり ($F(1,81)=4.41, p<.05$)、いじめへの対処行動の主効果も有意であり ($F(2,162)=4.73, p<.01$)、望ましさ×いじめへの対処行動の交互作用の効果も有意であった ($F(2,162)=6.29, p<.001$)。

まず、集団の言語的いじめが発生した時、被害者が女子の場合は男子よりいじめへの対処行動

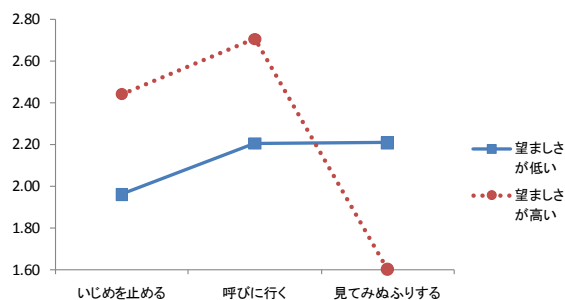


Figure 3 望ましさと対処行動の交互作用

を取りやすくなった。

さらに、交互作用の効果について、各条件の評定値を図に表したものがFigure 3である。LSD法を用いて有意水準を5%に設定して下位検定（多重比較）を行った。「望ましさが高い」子に対する評定値は「望ましさが高い」子より有意に大きい。というのは、望ましさの高い子にとって、望ましさの低い子より「大人など呼びに行く」「いじめを止める」「見てみぬふりをしない」可能性が高かった。これは仮説2を支持しなかった。

II 大学生の結果

高校生と同じように、分散分析を行った。各条件の評定値の平均と標準偏差を整理したものが表4である。

表4 いじめ場面（個人場面と集団場面）およびいじめ種類（身体的いじめと言語的いじめ）の平均と標準偏差（大学）

	全体		男子		女子	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
個人場面						
身体的いじめ						
いじめを止める	2.63	0.78	2.20	0.83	2.78	0.71
誰かを呼びに行く	2.68	0.97	2.50	1.00	2.75	0.97
見てみぬふりをする	1.79	0.92	2.25	0.97	1.62	0.85
言語的いじめ						
いじめを止める	2.52	0.84	2.70	0.80	2.45	0.86
誰かを呼びに行く	2.52	0.95	2.55	0.83	2.51	1.00
見てみぬふりをする	1.81	0.82	1.75	0.79	1.84	0.83
集団場面						
身体的いじめ						
いじめを止める	2.52	0.78	2.59	0.69	2.48	0.84
誰かを呼びに行く	2.70	0.94	2.52	0.75	2.80	1.02
見てみぬふりをする	1.89	0.81	2.00	0.78	1.83	0.82
言語的いじめ						
いじめを止める	2.58	0.86	2.59	0.84	2.57	0.89
誰かを呼びに行く	2.68	0.88	2.63	0.84	2.72	0.91
見てみぬふりをする	1.99	0.89	2.04	0.76	1.96	0.97

1. 個人場面

①身体的いじめ

分散分析の結果、いじめへの対処行動の主効果が有意であり ($F(2, 142)=9.19, p<.001$)、性×いじめへの対処行動の交互作用も有意であった ($F(2, 142)=7.47, p<.001$)。

まず、個人の身体的いじめが発生した時、傍観者は「大人など呼びに行く」、「いじめを止める」、「見てみぬふりをしない」傾向が強く示された。

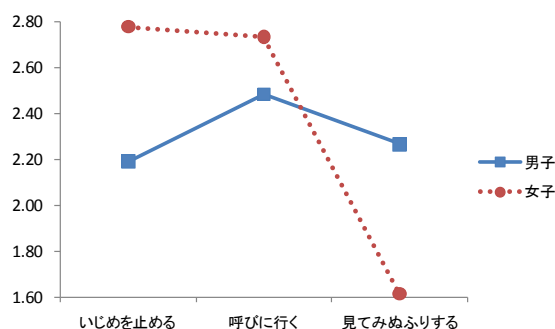


Figure 4 性と対処行動の交互作用

さらに、交互作用の効果について、各条件の評定値を図に表したものがFigure 4である。LSD法を用いて有意水準を5%に設定して下位検定(多重比較)を行った。女子に対する評定値は男子より有意に大きい。というのは、女子にとって、男子より「大人など呼びに行く」「いじめを止める」「見てみぬふりをしない」可能性が高かった。

②言語的いじめ

身体的いじめと同じように、分散分析を行った。その結果、いじめへの対処行動の主効果が有意であった($F(2, 144)=14.62, p<.001$)。個人の言語的いじめが発生した時、傍観者は「大人など呼びに行く」、「いじめを止める」、「見てみぬふりをしない」傾向が強く示された。

2. 集団場面

①身体的いじめ

分散分析の結果、被害者の社会的望ましさの主効果が有意であり($F(1,70)=4.09, p<.05$)、いじめへの対処行動の主効果も有意であった($F(2, 140)=15.91, p<.001$)。

まず、集団の身体的いじめが発生した時に、被害者の社会的望ましさが低いほうは高いほうよりいじめへの対処行動を取りやすくなった。また、傍観者は「大人など呼びに行く」、「いじめを止める」、「見てみぬふりをしない」傾向が強く示された。これは仮説2を支持した。

②言語的いじめ

分散分析の結果、いじめへの対処行動の主効果が有意であり($F(2,138)=10.47, p<.001$)、望ましさ×いじめへの対処行動の交互作用の効果も有意であった($F(2,138)=5.86, p<.001$)。

まず、集団の言語的いじめが発生した時に、傍観者は「大人など呼びに行く」、「いじめを止める」、「見てみぬふりをしない」傾向が強く示された。

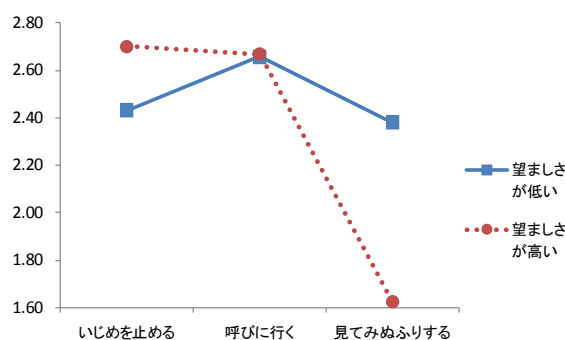


Figure 5 望ましさに対処行動の交互作用

さらに、交互作用の効果について、各条件の評定値を図に表したものがFigure 5である。LSD法を用いて有意水準を5%に設定して下位検定(多重比較)を行った。「望ましさが高い」子に対する評定値は「望ましさが低い」子より有意に大きい。というのは、望ましさの高い子にとって、望ましさの低い子より「いじめを止める」「見てみぬふりをしない」可能性が高かった。これは仮説2を支持しなかった。

考察

いじめ問題は加害者と被害者だけの問題ではなく、傍観者はいじめに対しても不可欠の背景になっている。傍観者たちは直接にいじめをしないが、いじめの発生または減少には重要な作用を及ぼすと考えられる。本研究はいじめる側といじめられる側だけではなく、傍観者も含まれていることを明らかにした。

1 主な結果の考察

1. 子どもの成績と傍観者の援助行動（仮説1）

本研究では仮説1に関して部分的に支持する傾向があった。いじめが集団の場合、身体的いじめでは、傍観者は、成績の高い子より低い子がいじめに遭っている時に、事態に介入し制止しやかった。それに対して、言語的いじめでは、傍観者は、成績の低い子より高い子がいじめに遭っている時に、事態に介入し制止しやかった。本研究では、子どもの成績を社会的望ましさの一つとして考えられたが、成績のみが傍観者の援助行動と直接に関係があるか否かはつきり言えない。

2. 子どもの社会的望ましさと傍観者の援助行動（仮説2）

本研究では仮説2に関して部分的に支持した。いじめが集団の場合、身体的いじめでは、傍観者は、積極的で社会的望ましさの高い子より、社会的望ましさの低い子がいじめに遭っている事態で、傍観者は介入、制止する行動をとることが多くなった。それに対して、言語的いじめでは、傍観者は、積極的で社会的望ましさの低い子より、社会的望ましさの高い子がいじめに遭っている事態で、傍観者は介入、制止する行動をとることが多くなった。

身体的いじめでは、望ましさの低い子は社会的地位が低くなって、「劣等感」が存在しているかもしれないので、いじめ対象になりやすい。傍観者は誰かが止めに入らなければ、事態がさらに悪化する危険があると推測するかもしれない。言語的いじめでは、望ましさの高い子は成績だけ集中して、周りのことを無関心になって、いじめの対象になれる可能性がある。望ましさのいい子ならいじめを助けに行くと思うのが当然だと考えられる。

なぜ個人場面で仮説1を支持しなかったのは、加害者一人の場合には、一対一の特定性があって、援助をしにくくなる。加害者に怖がりの感じを持って、傍観者がいじめに介入・制止しがたい。

2 いじめへの介入を促進する状況要因の総合的考察

1. 被害者の社会的望ましさ

いじめられる理由がいくつかあって、「太っている」、「小さい」、「力が弱い」といった身体的なこと、障害や国籍、兄弟のことなど、本人にはどうしようもないこと、「生意気」「大人しい」「暗い」「目立ちすぎ」「わがまま」など性格的なこと、なんでもいじめの理由になること。従って、本研究では、被害者の社会的望ましさは性格、成績、人間関係という3つの側面から想定された。

社会的望ましさ (social desirability) とは、人の行動や性格が、その社会においてどの程度望ましいと考えられているかを指す。社会的望ましさが対人認知研究で問題となることがある。普通多くの人が社会的望ましさの高い行動をすると考えられているので、ある人の行動の意図や性格の推定をする際に、社会的望ましさの高い行動はあまり手がかりとならない (Jones, E. E. & Davis, K. E.1965)。逆に、社会的望ましさの低い行動は、行動の意図や性格の推定の手がかりと

なりやすく、記憶にも残りやすいことが知られている。

身体的いじめが発生した時、望ましさが低い被害者に対して、傍観者はいじめ援助行動をとりやすくなること。なぜ、望ましさの高い子の方が援助されにくいのか、原因は明らかにできてはいない。一つには、望ましさの高い子は、しっかりしていて、周囲の子どもが援助に入らなくても自分で解決する力を持っていると受けとめられる傾向が強いのかかもしれない。対して、問題を持つ子どもは、誰かが止めに入らなければ、事態がさらに悪化する危険があると周囲の子どもは推測するのかもしれない。これは日本の文化につながって、「判官鼻眞」（『広辞苑』：源義経を薄命な英雄として愛惜し同情すること。転じて、弱者に対する第三者の同情や鼻眞）という言葉で説明できる。弱い人間に助けて、とにかく冷静に判断しないで、より同情な気持ちを持って、すでに援助すること。この点については今後明らかにすべき課題である。

言語的いじめが発生した時、望ましさが高い被害者に対して、傍観者はいじめ援助行動をとりやすくなること。善良な子どもであれば援助することが当然だと思われるのかもしれない。

2. 加害者の集団性

最初は仲もよく、対等な関係だったのに、次第に片方がもう一方を支配し始めることがある。同じグループ内で、力関係に差ができて、いじめの対象になることもある。いじめが発生した特に、集団グループより一人の方に援助行動をとりやすくなったことがわかる。

オルヴェウス（Olweus, 1978）の指摘によれば、児童生徒の集団では、いじめに対して非難、反対する者たちの勢力の強さの度合いによって、いじめの発生や展開が抑制されたり、悪化したりすることから、いじめに加担する勢力と加担しない勢力に大別して、両カテゴリーの勢力関係を観察していくことが重要となるのである。また、加害者が集団内で孤立するような状況では、彼らがいじめを行うことは極めて困難である。

3. いじめの種類

大勢で一人の人を無視することは、心に対する集団リンチである。いじめられた経験を持つ多くの人が、言語的いじめ（無視など）がいじめの中でもっと傷つく行為だと答えた（元, 2012）。言語的いじめは、している方はいじめたことではないと思っても、されているほうは深く心が傷つくことがある。言葉などでいじめをはやし立てたりするなど間接的な形でいじめを促進する役割を果たす強化者の問題性については、主体的にいじめを行う加害者や、加害者の補助的役割を果たす援助者のように直接的な関わり方をしないため（Salmivalli et. Al., 1996）、その間接性ゆえに加害行為の発見が難しくなる。

4. 高校生と大学生について

①高校生と大学生の共通点

身体的いじめが発生した時、高校生でも大学生でも、加害者の集団性に関わらず、いじめ援助行動をとりやすくなる。さらに、加害者が集団の場合に、望ましさの高くない被害者より高いほうに、いじめ援助行動をとりやすくなる。

言語的いじめが発生した時、高校生でも大学生でも、加害者が集団の場合に、いじめ援助行動をとりやすくなること。さらに、望ましさの高くない被害者より高いほうに、いじめ援助行動をとりやすくなる。

エリクソンによる人生段階と心理・社会的危機 (Newman & Newman, 1984; 福富訳, 1998) では、青年中期 (13～17歳) は「集団同一性vs.疎外」、青年後期 (18～22歳) は「個人的同一性vs.役割拡散」と指摘された。というのは、高校生の集団性が強く、大学生の個人性が強いのが分かる。しかしながら、本研究では、大学生と高校生の集団性がはっきりでなかった。いじめについての正義感だと考え、いじめが発生したら、集団性と関係なく、援助行動をとりに行く。

②高校生と大学生の違い

身体的いじめが発生した時、加害者が個人の場合に、大学生は男子より女子の方がいじめ援助行動をとりやすくなる。一方、加害者が集団の場合に、高校生は男女問わず、いじめ援助行動をとりやすくなる。

言語的いじめが発生した時、加害者が集団の場合に、高校生は男子より女子の方にいじめ援助行動をとりやすくなる。

高校生では、それまで同世代・同性との関わりが中心であったものが、いよいよ異性へ向かい始め、男性性・女性性の確立すなわち性同一性の確立が大きなテーマとなる。高德 (1999) は、現代のいじめの特徴の一つに「思春期特性」をあげた。「思春期は、親からの自立の時期であり、いじめにはそのための仲間、友だちとの『集団同一性』が象徴的に儀式として試みされるという特性がある」と述べている。本研究では、身体的いじめの場合に、性差がでなかった。一方、言語的いじめの場合に、性差がでてきた。女子の方が性格の優しさ、繊細的、細かさなどの原因でいじめ援助行動をとりやすくなるかもしれない。

大学生では、自らをある程度現実的客観的に評価できるようになり、すなわち安定した自己評価が可能となり、また適度な妥協及び欲求充足の遅延が可能となり、変わりに現実的充足が得られることになる。本研究では、言語的いじめより身体的いじめの場合に、大学生がいじめ援助行動をとりやすくなる。言語的いじめの陰湿さなどによって、いじめを発見しにくいかもしれない。それに対して、身体的いじめがわかりやすく、大学生なら、いじめが悪いことだと思う正義感を持って、いじめを助けに行くと考えられる。

5. その他

いじめは、加害者・被害者の二者関係だけではなく、周囲の生徒による影響も受けることが指摘されている (Atlas & Pepler, 1998)。いじめの減少困難や助長の要因として傍観者が挙げられ、傍観者層の多寡は、被害者の多寡と最も強い有意な相関を示すことが分かってきた (森田, 1990)。中村ら (2014) の調査によると、傍観層の生徒がいじめを止めない原因を2つ分けている。一つはいじめ介入するスキルを持っていない、もう一つはスキルを持っていても用いていないことである。介入スキルの学習によって介入行動が取れるようになり、いじめの抑止につながる可能性がある。学級の多数を占めるとされる傍観層の生徒たちが、実際にいじめへの介入スキルを習得することは、いじめの抑止に有効であろう。

いじめは、現代社会の進化とともに、多様な形態も出てきた。ネット上のいじめは現在大きな問題になっている。下田博次 (2008) は、ネットいじめを「これまでの教室内あるいは学校内の対面的人間関係の場で行われる罵倒、暴力などのいじめとは異なり、インターネット上での非対面あるいは匿名的人間関係において発生するいじめ」と指摘した。ネットいじめの非透明化、可視性が低いなどのために、管理しにくくなる。特に「学校の裏サイト」で匿名のいじめなど、問題解

決が重要になっている。

栗原（2007）は、いじめの早期発見と早期対応を促す教師のあり方として、教師が子どもに信頼されることと共に、教師の意識を変えることが必要であると指摘している。すなわち、いじめがないことを前提に子どもたちに接するのではなく、いじめの可能性を前提に接することで、早期の的確な対応が可能になるという。教師は、いじめ問題をどういうふう完全に把握するか、教室全体がいじめ防止、抑止に結び付く雰囲気をもどのように作り出すのかなどを明らかにしたい。

3 本研究の限界と今後の課題

まず、本研究の限界について言及する。本研究の調査人数について、男子より女子のほうが多いので、性差について考察しなかった。今後、調査人数のバランスをよく配慮した上で、そして一定の地域だけではなく、他の地域でも調査を実施し本研究を再検証する必要がある。また、本研究では高校生と大学生を対象として回顧調査を実施したが、今後、いじめの渦中にある子どもたちを対象にし、同じの調査を行い、本研究と同様な結果が得られるかどうかを検討する必要がある。

さらに、いじめは、単に、加害者と被害者の単純な人間関係だけで発生するものではない。その背景に多くの社会的・経済的要因が絡みあって存在する。性別、家族構成、家庭の経済状況、本人の学業成績などといった要素が、いじめと関連すると考えられている。

今後の課題は、傍観者の介入を抑制する要因を明らかにすることと、傍観者が援助者になるための外的要因は何か、どんな抑制要因が大切なのかを中心に研究を深めたい。

引用文献

- Atlas, R. S., & Pepler, D. J. (1998) Observations of bullying in the classroom. *Journal of Educational Research*, 92, 86-99.
- J-cast 2007年7月10日 ワイドショー通信簿学校ぐるみ！「学力テスト」不正操作
<http://www.j-cast.com/tv/2007/07/10009144.html>
- NHK, 2015a 報告書 6件を「いじめ」と判断日本弁護士連合会 2008 全国学力調査に関する意見書
http://www.nichibenren.or.jp/library/ja/opinion/report/data/080215_000.pdf#search='%E5%85%A8%E5%9B%BD%E5%AD%A6%E5%8A%9B%E3%83%86%E3%82%B9%E3%83%88+%E4%B8%8D%E6%AD%A3'
- NHK 2012年9月6日 奈良いじめ 同級生を書類送検 NHK NEWS WEB
<http://www3.nhk.or.jp/news/html/20120906/k10014830501000.html>
- Olweus, D. 1978 *Aggressions in the schools: bullies and whipping boys*. Washington D. C. : Hemisphere Publishing Corporation.
- Salmivalli, C. , Lagerspetz, K. M. J., Bjorkqvist, K., Osterman, K., & Kaukiainen, A. 1996 Participant roles and their relations to social status within the group. *Aggressive Behavior*, 22, 1-15
- 朝日新聞 2007年7月8日 学校ぐるみで成績向上「不正」の疑いも・足立区立小
<http://www.asahi.com/edu/student/news/TKY200707080125.html>
- 安藤美華代 (2013) 『いじめを予防する心理教育 “サクセスフル・セルフ”』金子書房、臨床心理学の実践アセスメント・支援・研究、p239-p255.
- 大坪治彦 (1998) 「いじめ傍観者の援助 抑制要因の検討」、『鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編』

- (50)、245-256.
- 寒川由美子 2015年2月28日 NHK時論公論「気づけなかったSOS～川崎・男子生徒殺害事件～」
<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/210440.html>
- 栗原真二 (2007) 「いじめの早期発見と早期対応のために:学校教育相談の立場から」、『臨床心理学』、7、447-453.
- 元笑予 (2012) 修士論文「いじめにおける傍観者の援助行動を促進する状況要因について」未公開
- 下田博次 (2008) 『学校裏サイト』東洋経済新報社 2008年4月10日発行.
- 杉原一昭 (1986) 「「いじめっ子」と「いじめられっ子」の社会的地位とパーソナリティ特性の比較」、『筑波大学心理学研究』、第8号、63-72.
- 高德忍 (1999) いじめ問題ハンドブック つげ書房新社 P12
- 中村玲子・越川房子 (2014) 「中学校におけるいじめ抑止を目的とした心理教育的プログラムの開発とその効果の検討」『教育心理学研究』2014、62、129-142.
- 森田洋司 (1990) 『家族における私事化 現象と傍観者心理』現代のエスプリ、271、110-118.
- 森田洋司・清永賢二 (1994) 『新訂版 いじめ 教室の病』金子書房、1994年.
- 文部科学省 (2012a) 「平成23年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」、初等中等教育局児童生徒課、2012年9月11日、
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/_icsFiles/afieldfile/2012/09/11/1325751_01.pdf.
- 文部省 (1984) 小学校生活指導資料3 児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題
- 坂西友秀 (1995) 「いじめが加害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差」、『社会心理学研究』11、105-115.
- 山崎洋 (1996) 「いじめにおける第三者の援助態度を抑制する要因」、『日本教育心理学会総会発表論文集』、38、266.

(2015年9月30日提出)

(2015年10月7日受理)

On the situational factors that encourage assisting behaviors of the bystander in bullying:

A study that focuses on the influence of “social desirability” of the victim

Yuan XIAOUYU

The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University

Tomohide BANZAI

Psychology and Education Practice

Purpose of this study is to clarify a factor to promote their intervention. when a looker-on saw “bullying”. We carried out a questionnaires about the bullying to both high school student and university students. The main results are as follows. Bystanders have a tendency to help the low victim (high academic achievement, human relations good) than the high victim of social desirability (low academic achievement, human relations bad). This trend is more pronounced in a group situation than individual situation. We discussed the ease of bystander intervention in bullying, from the point of view of the difference of the height of the interpersonal skills and social capabilities, and the degree of autonomy of the victim.

Key Words: Bullying, Victim, Bystander, intervention, social desirability